

「さあ、出発」。『お別れ式』に下津井貯木作業場を出発する森林軌道

「お別れ式」では、神官がのりとをあげたあと、市原さんがディーゼルカーに酒をかけ、長年の労をねぎらった。やさしくいたわるよつに。

なお、佐川山国有林は、四十二年度中に植林を終わり、数十年後には杉、ヒノキの人工林に生まれ変わる。

【佐川】県下でただ一カ所になつていた幡多郡大正町下津井と佐川を結ぶ森林軌道が、大正管林署

佐川山国有林の伐採完了で終を消すことになり、二十五日、現地に岐する坂島町口・佐川間二・一キロ、西村署長、鍋島大正町長、黒原同町会議長らを迎えて、終山式とともに、田野々一下津井間が撤収され、

坂島間二十八キロと同様かつ分割したことになった。最近は山の開発が始まつても経済効果の低い軌道の伐採を完了。森林軌道も姿を消すことになった。

余年間の哀歎がこめられている。十七年間かかり十三万五千立方メートルの伐採が終り、森林軌道も姿を消すことになった。最近は山の開発が始まつても経済効果の低い軌道の伐採を完了。森林軌道も姿を消すことになった。最近は山の開発が始まつた」と。急病人が田中で深夜田野より林道をつけているだけに、文

さよなら

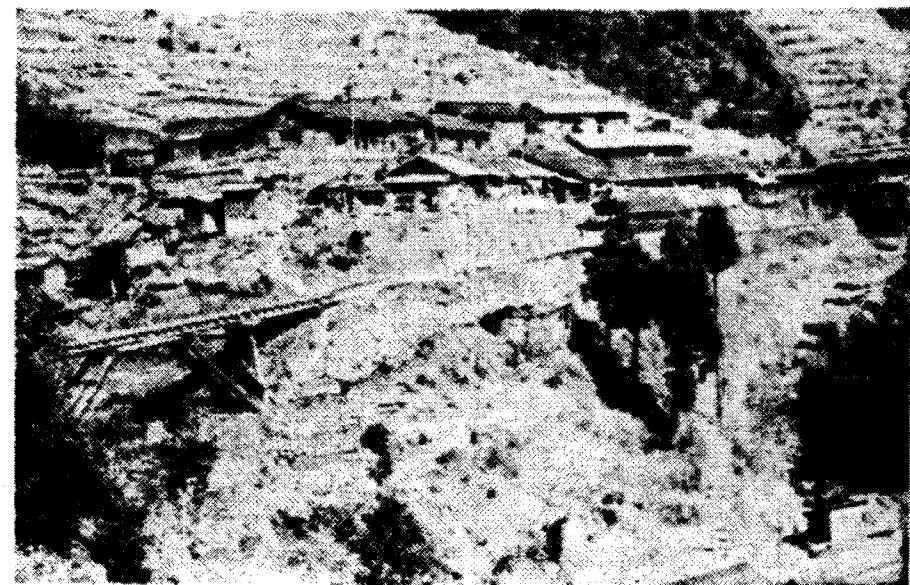
「下津井～佐川」

最後の森林軌道

にお別れ式が行なわれた。

同管林署に坂島山国有林と佐川山国有林の開発のため、森林軌道が敷設されたのは、昭和十五年だった。区间は幡多郡大正町田野々

佐川山伐採完了で 27年の歴史に幕

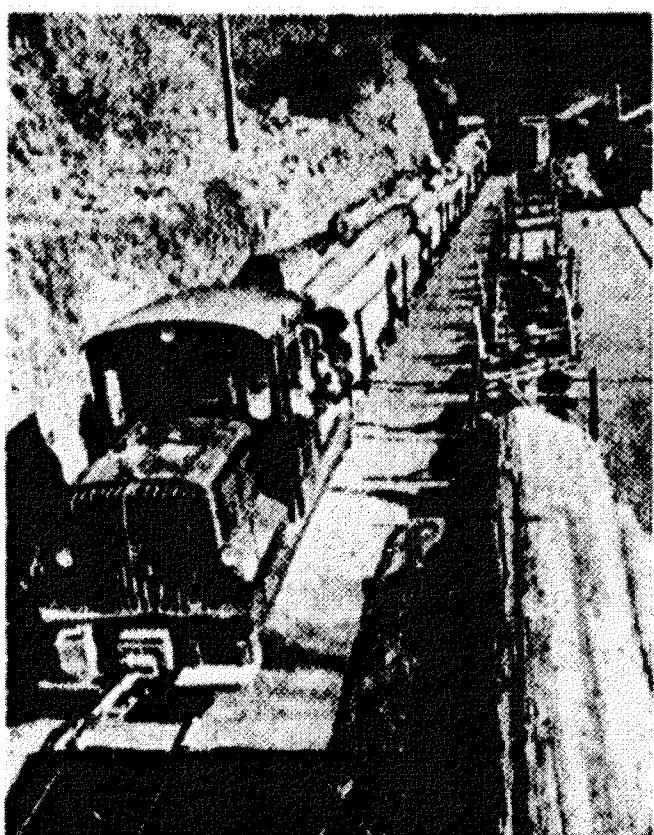


愛媛との県境に近い、海拔三百三十㍍の佐川製品事業所

二年後には姿を消す

—県下の森林鉄道—

大きな足跡を残し—



半世紀以上にわたって奥地の人たちに恩恵を与えてきた高知県下の森林鉄道は、二年後の四十年で姿を消すことになった。

山奥から木材を搬出するのにはなんといっても交通網の整備が先決問題。このため国有林事業に

ち早く取り入れられたのが森林鉄道で、本県でも明治三十九年には安芸郡の田野町、安田町、馬路村、北川村を結ぶ安田川林道にはじめてレールが敷かれた。最初は牛や犬に引かすといった原始的な方法をとっていたが、大正の半ばには機関車がはいり、鉄道の開発が遅れていた本県には奥地と平たん地を結ぶ“山の動脈”となつた。

木材の運搬はもとより、旅客専用の客車も走るようになり、奥地の近代化に大きな役割を果たしていった。林業開拓会社の補助工事による電源開拓に伴つて急ピッチに進んだ。電源開拓会社の補

活躍していたころの森林鉄道（桑浦林道の安芸郡田野町立岡）

に開拓が進み、さる二十六年には六十三線、五百八十七キロの軌道が山はだをぬつた。その後、自動車が急速に普及したことも手伝つて、她県のよい自動車道へ切り換えられるようになり、とくに桑半利川などの電源開拓に伴つて急ピ

速で機械の軌道ははすして勝道にするが、地元の希望があれば公用の道路として払い下げる方針をとっている。

佐川山林道と伊尾木林道の一部が運行しているにすぎない。高知営林局では三十七年からの四年計画で百十三キロを自動車道にする計画で機械の軌道ははすして勝道にするが、地元の希望があれば公用の道路として払い下げる方針を

り、三十六年度末には三十六線、二百六十キロに減った。

ことには、いつからも安田川

林道の馬路—明神口間、安芸市の伊尾木林道の古井—影崎間など地域の住民に大きなつながりを持つ

て、軌道の運行が止まつた。こうして老齢のもの思い出を絆めて、住民の足としての役割りは終わり、現在は幡多郡大正町の

土佐

近代化遺産

1997(平成9)6.13
朝刊 14面



橋。建造から
のシンボルと
面に映してき
タがからみつ
く



森林鉄道で木材運搬

橋。建造から
のシンボルと
面に映してき
タがからみつ
く

下津井（幡多郡大正町）の地名は、下流に崩れた所がある。あるいは、船着き場がある所という意味らしい。下流に控える渓谷がこのことを意味するのだろか。四方十川の支流、榜原川の流域にあって、ここで払川、佐川、坂島川の三つの谷川が合流する。織田・豊臣の世から書に記されている場所である。

めがね橋は、払川が榜原川と接する地点に架かる。コンクリートのアーチ橋。この上を木材を運搬する森林鉄道が通った。

近くに住む八木為夫さん（六十四歳）によると、国有林のある佐川山から町の中心部の田舎々までトロッコが通じていたという。乗務員が乗る車両を連結していた

下津井（幡多郡大正町）の地名は、下流に崩れた所がある。あるいは、船着き場がある所という意味らしい。下流に控える渓谷がこのことを意味するのだろか。四方十川の支流、榜原川の流域にあって、ここで払川、佐川、坂島川の三つの谷川が合流する。織田・豊臣の世から書に記されている場所である。

めがね橋は、払川が榜原川と接する地点に架かる。コンクリートのアーチ橋。この上を木材を運搬する森林鉄道が通った。

めがね橋が完成したことを要約すれば、こうなる話を方々で聞いた。

ところが、高知県林局に残っている資料によると、昭和十四年から翌年にかけて森林軌道の二十九カ所で橋の工事を行い、うち八カ所が十四年中に完成している。めがね橋（大正林道・払川橋）は、この八カ所の中に入っているようなのである。この時期以降の工事の記録は残っていない。決定的なのが、同局が四十八年に発行した「治山林道の変遷」と題した写真集。そこには、めがね橋が写っており、「昭和十四年」と記されている。ダムの発電開始より五年早

愛着ある地域のシンボル

が、一般住民は乗れず、純粹に木材だけを運んだ。

幅一メートル、長さ八十二㍍。従来

の森林鉄道の橋には鉄橋が使わ

れていたが、木材不足に伴ってコンクリート橋になった。

昭和十九（一九四四）年、榜原川に津賀ダムができた。その上流にあたる下津井はダムのたん水域になった。当然、水位は上昇、多くの土地が水没する。これに合わせて、その年、橋が架け替えられ、今の高さのめがね橋が完成した。

要約すれば、こうなる話の方々で聞いた。

ところが、高知県林局に残っている資料によると、昭和十四年から翌年にかけて森林軌道の二十九カ所で橋の工事を行い、うち八カ所が十四年中に完成している。めがね橋（大正林道・払川橋）は、この八カ所の中に入っているようなのである。この時期以降の工事の記録は残っていない。決定的なのが、同局が四十八年に発行した「治山林道の変遷」と題した写真集。そこには、めがね橋が写っており、「昭和十四年」と記されている。ダムの発電開始より五年早

めがね橋

大正町下津井

時代困窮で今に残る

く、この橋は好きだったのだ。
どうして、誤った話が走説の
ように伝わっているのだろう
か。推測にすぎないが、ダムに
よる環境の変化を表す時に、人
々は地域のシンボルであるめ
がね橋を持ち出した。川に対する
思いと橋への愛着からだ。そし
て、橋脚のどこまで水がきた、
と言っているうちに五年の誤差
はいつの間にかなくなり、「ダ
ムで水位が上がったから橋も高
くなった」となったのである。
その方が確かに物語になる。

森林鉄道は四十一年に全廃となつた。軌道ははがれ、めがね橋の上は代わって今、水道が渡っている。いわば水道橋になつた。そう言えば、わが国最大の石造アーチ用水路橋として有名な熊本県の通潤橋を連想させなくもない。

今から六十年近く前、仮に物

資が豊富で鋼材に困らなければ、ここは鉄橋になっていたはずだ。軌道が廃止された後、鉄橋であったならば今日まで残つたであろうか。時代の困窮が今となつては、いい目に出了たようである。

景観と調和する 三連のアーチ橋

な安心感をもたらす。

ぐ瀬戸大橋まで発達した。この型枠の構成は四万十川に

森林鉄道の軌道がはがされた今は、橋の上を水道が通る。中央のコンクリートが塗られた所に水道管が埋設されている

橋にかかる力は橋の部材軸を伝わって大地に伝えられる。これらの力に対応して、(つら)橋、アーチ橋の三つのかれで下に水が流れ、その上(材質感)に見られるもの形である。行橋は一本の木きたが、行(けた)橋、吊橋は、石造りからねが造り、人や動物が通った。この形が倒れて谷を越えて横たわった時、人も動物もそれを利用する。下津井のめがね橋は半田橋は構造体それ自体がバラバラで、型枠板の跡が見える。下津井のめがね橋の三つの形の鉄筋コンクリート造りの支流の丸木橋はこの形である。吊橋は谷を越えて垂れ下づくと、型枠板の跡が見える。下津井のめがね橋の三つの形の鉄筋コンクリート造りの支流の丸木橋はこの形である。吊橋は谷を越えて垂れ下づくと、型枠板の跡が見える。

(清瀬博彦・高知工業高定時制教諭)

新緑の季節、大正町の田野を経由して、橋原川をさかのぼり下津井まで足を延ばした。橋原川は自然の露風をそのまま残している。ここで周囲の景観と調和し、その美は両岸の新緑の緑が体にあり、的感動が人々の心に穏やか

な感覚をもたらす。三連アーチ橋である。遠望で、アーチはパンにより形が違う。個性的な景観を見せていく。初期から中期にかけてのものが多い。下津井のめがね橋の半田橋は、石造りからねが造り、人や動物が通った。この形が倒れて谷を越えて横たわった時、人も動物もそれを利用する。下津井のめがね橋の三つの形の鉄筋コンクリート造りの支流の丸木橋はこの形である。吊橋は谷を越えて垂れ下づくと、型枠板の跡が見える。下津井のめがね橋の三つの形の鉄筋コンクリート造りの支流の丸木橋はこの形である。吊橋は谷を越えて垂れ下づくと、型枠板の跡が見える。

その時代

昭和14年

物価統制など生活面に関する公布・実施された法や規則など
3月 軍用資源秘密保護法
4月 米穀配給統制法
7月 製鐵設備制限規則
8月 石炭販売取り締まり規則
9月 物価統制実施要綱答申
石油配給統制規則
機械設備制限規則
第2次世界大戦始まる
10月 価格等統制令
地代家賃統制令
賃金臨時措置令
会社職員給与臨時措置令
電力調整令
米穀配給統制応急措置令
11月 小作料統制令
給動員物資使用取用令
暴利行為等取り締まり規則
肥料消費調整規則
土地耕作物管理使用取用令
工場事業物使用取用令

仕事、営み

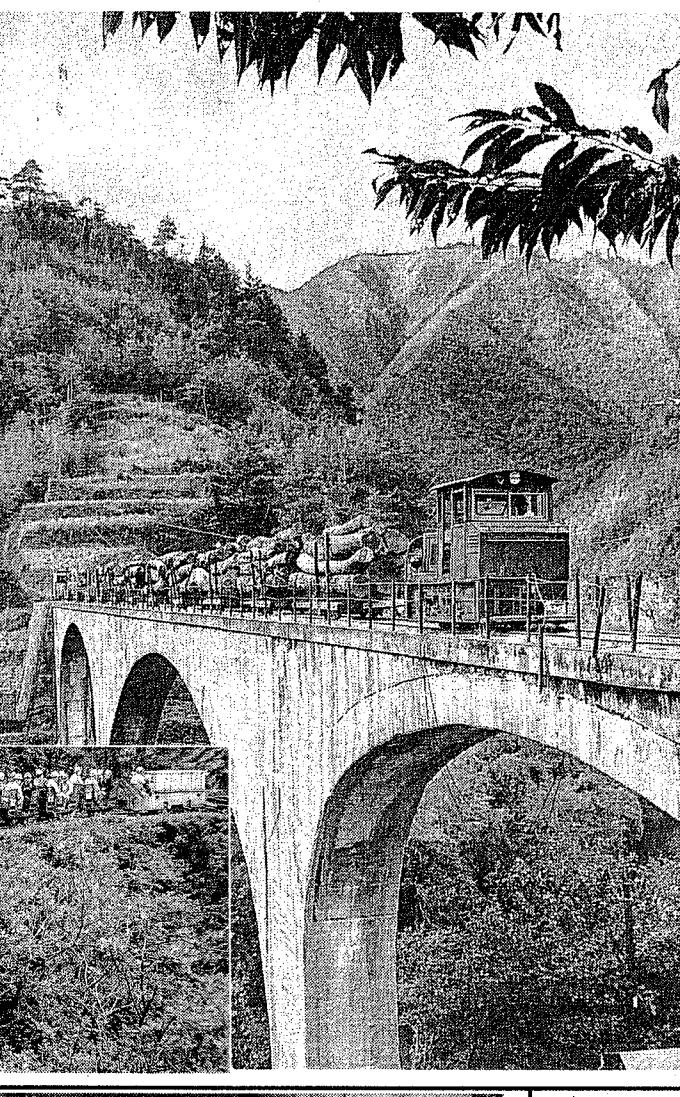
一期作
昭和40年

昭和四十年四月、南国市での二期作風景。一年間で二度水稻を収穫する二期作の記録は、藩政時



森林鉄道
昭和41年

明治四十年、林産物を運ぶ「森林軌道」が、県内で初めて安芸郡内に登場した。動力車がないため、上りは犬や牛が引っ張っていた。機関車を使う「森林鉄道」が県内に導入されたのは大正時代。各営林署に普及し、ピーク時の昭和二十五年には総延長七百四十キロに達した。林産物だけなく、山村の住民の貴重な交通手段でもあったが、やがて自動車での輸送に取って代わられ、昭和四十二年の大正林道佐川山線を最後に、四国から姿を消した。写真は昭和四十一年、幡多郡大正町の大正営林署の森林軌道。かつて栄えた山の植林産業は現在衰退。安芸郡馬路村に観光用の鉄道が一部復活し、名残を伝えている。

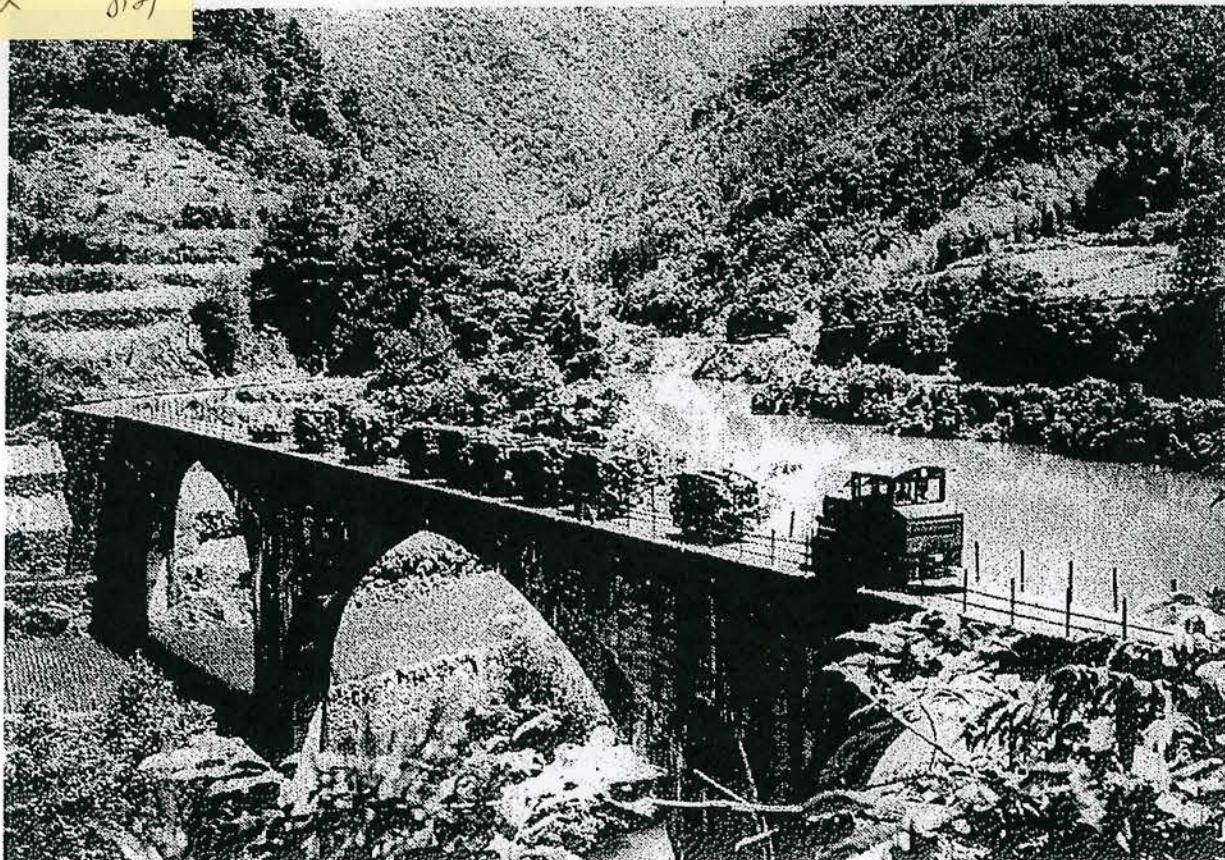


白滝鉱山
昭和39年

男たちがトロッコで行く。山に野太い笑い声が響きわたる。土佐郡大川村の白滝鉱山。昭和三十年代、鉱山街の居住者は二千人を数え、劇場やパチンコ屋などが立ち並んだ。「白滝銀座」。そんな名もあった。しかし四十年代に入っ



提供写真 教育委員会
のり



下津井の眼鏡橋 1960年ごろ

わが町の100年
20世紀ワーリングト

大量の材木を載せて、眼鏡橋の上を走るトロッコ列車。林業にまだ活気があった時代のひとこまだ。

大正林道佐川山線は、佐川山から切り出した良質のヒノキやトガなどを田野々まで輸送。下津井などの住民の足としても利用されていた。

眼鏡橋は鉄筋コンクリートの三連アーチ型で、高さ約二丈八尺、全長約八十二尺。一九三九（昭和十四）年に同線の軌道変更に伴って架けられた。道が悪く、機械もない時代。建設工事には大勢の朝鮮人労働者が従事していた。

当時、工事現場をよく見て

トロッコ列車で大量の材木を運んでいた
(大正町下津井・大正町教育委員会提供)

緑のツタが絡まるその姿
は、郷愁を感じさせる。

いた下津井の芝金寿さん（七十九歳）は「大変な工事やったと思いません。足場は原木をかずらや縄で縛って組んだ粗末なもの。その上で危険な作業をしておりました」という。

すぐそばの津賀ダム建設工事でも、朝鮮人労働者が多く使われた。事故で死者が出ると、遺体を山に捨てたという話も耳にしたという。

その後、林業は斜陽となり、道路も整備され、森林鉄道は一九六七（昭四十一）年に全廃。軌道ははがれ、眼鏡橋は下津井の集落に水を運ぶだけの「水道橋」となった。

二〇〇一（平成十三）年、町は下道一下津井地区を結ぶ森林軌道跡を遊歩道として整備。天然林の中を樺原川沿いに七・三キロを歩くと、眼鏡橋



42.3A-8大正署 轟崎苗畑4
S25



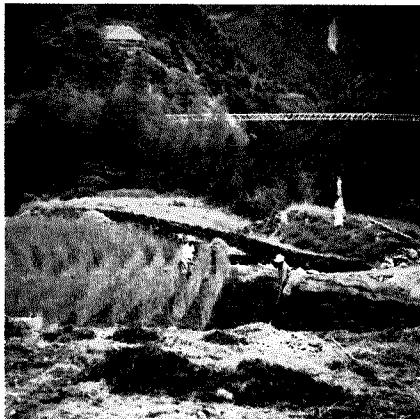
42.3A-8大正署 轰崎苗畑6
S25



42.3A-8大正署 轰崎苗畑7
S25



42.3A-8大正署 轰崎苗畑10
S25



42.3A-8大正署 轰崎苗畑11
S25 山内苗畑坂島



42.7A-69大正署 軌道修繕
S25

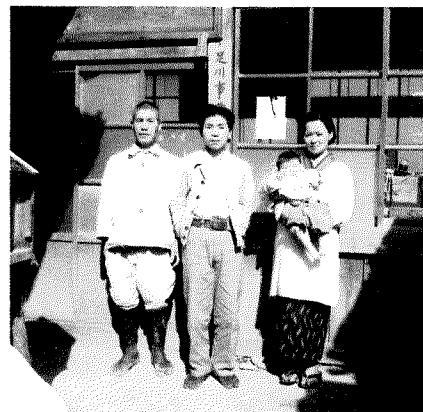


42.8A-5大正署 製炭(坂島)2
S25

大正十二年八月



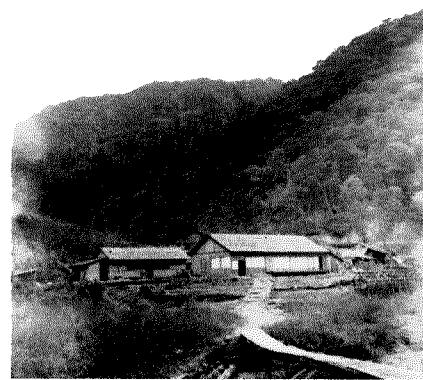
01A-702森林軌道(大正町田野々附近)
S16



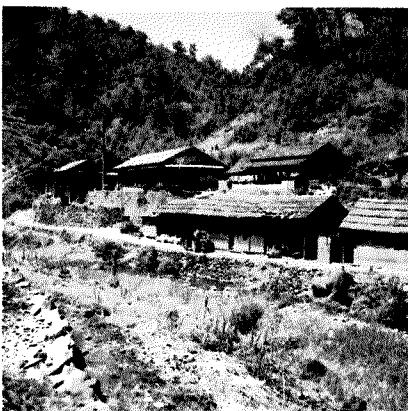
42.1A-8大正営林署アルバム(人物)6
S25



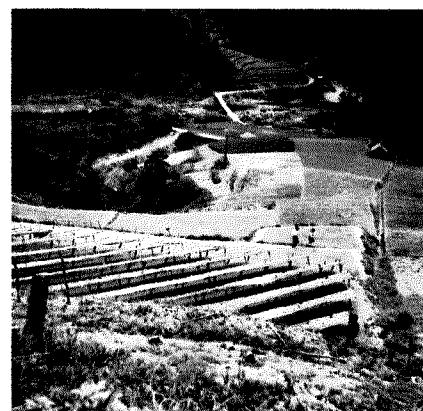
42.1A-11佐川事業所(大正)1
S25



42.1A-12芳川事業所(大正)1
S25



42.1A-12芳川事業所(大正)2
S25



42.3A-8大正署 轟崎苗畠1
S25

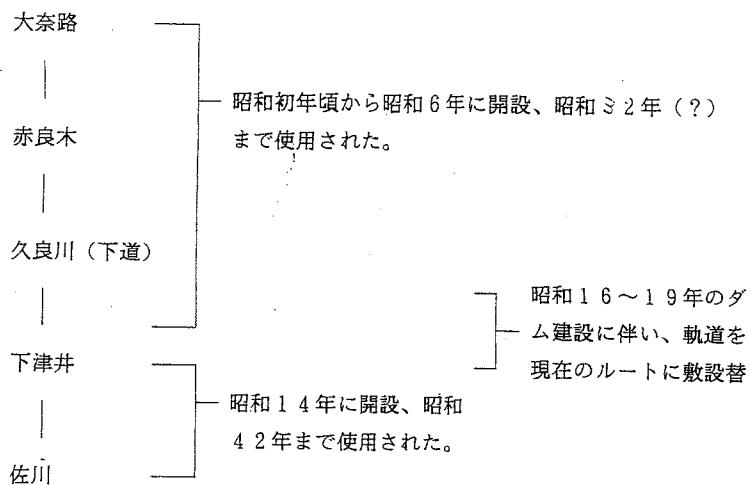


42.3A-8大正署 轰崎苗畠3
S25

森林鉄道開設史（聞取調査による）

大正當林署

〔ルート〕



(1) メガネ橋について

昭和16～19年のダム建設での軌道の敷設替により、電力側で建設したもので、元の軌道は橋脚部を通っていた。
橋の完成は昭和19年と思われる。

(2) 軌道のレールについて

日露戦争の戦利品（旅順要塞で使われていたもので、別名「満州レール」と呼ばれていた）を使用していた。

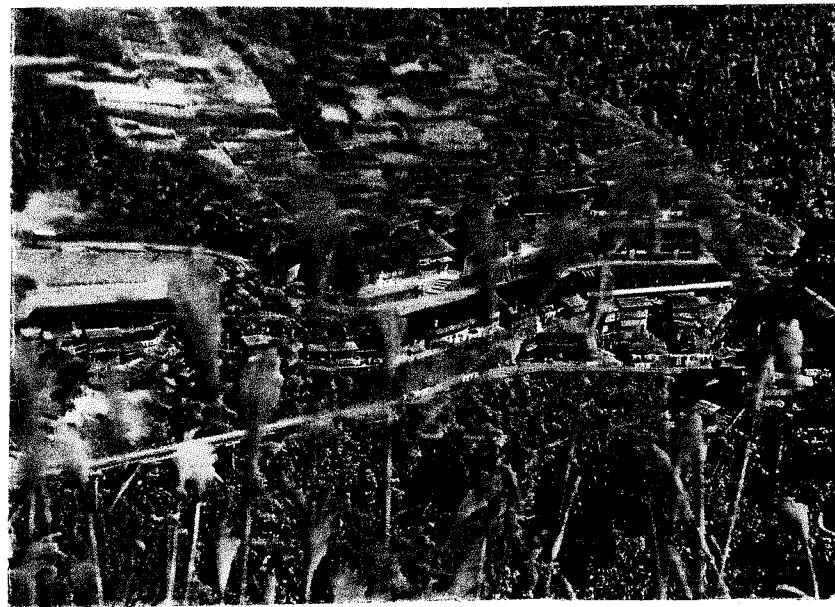
位 置	名 称	級 別	開設 年度	延長 km	軌条別 延長 km	工事費 万円	備 考
高知県安芸市	別役線	2	昭6	10.8	9K	196	S 42自へ
"	横荒林道	"	"27	4.8	6K 1.6 9K 3.2	490	"
"	伊尾木林道 久々場山線	"	"26	6.0	6K 1.5 9K 4.5	1,579	
" 香美郡物部村	大柄林道	"	大3	8.5	6K 2.7 9K 5.8	43	S 35撤収 予定
" "	杉熊線	"	昭8	0.5	6K	0.3	"
" "	河波谷分線	"	"21	1.3	"	71	"
" 南国市	中の川林道	"	"6	3.9	"	391	
" 土佐郡土佐村	樺山林道	"	"15	1.4	"	31	
" "	中の川林道 石小屋線	"	"28	4.1	6K 3.1 9K 1.0	493	
" "	一の谷林道 大師谷線	"	"29	0.7	6K	98	
" 本川村	長沢林道	"	"2	2.3	"	219	
" "	奥南川線	"	"10	8.0	9K	773	
" 吾川郡池川町	安居林道	"	"元	12.6	6K 3.6 9K 9.0	124	
土佐郡本川村	長沢林道 牛箱谷支線	"	"26	2.3	6K	276	
" 高岡郡大野見村	下弓川林道	"	"20	3.5	"	134	
" "	桑の又林道	"	" "	4.4	"	362	
" 東津野村	不入山林道	"	"26	5.1	"	219	
" 窪川町	森ヶ内林道 松葉川線	"	"2	8.1	6K 7.2 9K 0.9	251	
" "	折合林道 折合川線	"	"18	1.0	6K	1.9	
" 輪多郡大正町	坂島線	"	"10	6.3	6K	200	S 32
" "	佐川山線	"	"14	7.3	6K 2.5 9K 4.8	583	S 42
" 十和村	野々川林道	"	"7	4.9	6K	262	
" 西土佐村	黒森林道 神殿谷線	"	"23	1.8	"	195	
" 中村市	大物川林道	"	"元	10.7	"	438	
愛媛県宇和島市	滑床林道	"	大15	4.4	"	2.8	
"	八幡山線	"	昭25	2.9	"	389	
徳島県三好郡東祖谷山村	祖谷山林道	"	"12	4.0	"	493	
" "	" 11支線	"		0.5	"	54	
高知県安芸郡馬路村	鹿伏岐線	索道	"30	1.1		357	
土佐郡本川村	長沢林道 牛箱谷支線	"	"26	0.9		366	

省林局管内 計 576.2km

県上益城郡甲佐町、矢部町 下益城郡砥用町	内大臣	2	大4	42.6	9K	4,168	
熊本県上益城郡矢部町	" 小松谷支線	"	" "	0.4	"	0.1	
" "	" 鴨猪谷支線	"	"15	14.8	"	2,377	
" "	" 北内谷支線	"	昭25	1.2	6K	127	
" 人吉市段塔町	段塔、宮ノ谷支線	"	"10	7.3	"	75	S 37~40 自へ
" 球磨郡水上村	鍵掛	"	"18	7.1	"	458	
宮崎県東臼杵郡北川村 大分県南海部郡宇目村	赤水	"	明39	5.1	6K 0.1 9K 5.0	441	3.7km S 37自へ
大分県南海部郡宇目村	小野市	"	昭8	6.5	9K 6.4 12K 0.1	560	
" "	" 何山支線	"	"22	4.5	9K 4.5 12K 0.1	1,415	
" "	赤水、板戸山支線	"	"23	7.0	6K 3.2 9K 3.8	1,130	

1957 年止年
1967.

佐川を語る会



1958年 秋

平成 23 年 5 月 14 日 (土) 13:30~
於：四万十農協会館

旧営林署施設周辺 住民ら14日懇親会

さんによると、同事業所は1940年ごろに開所し、67年閉鎖。周辺集落には営林署職員や関連業者ら約60人が住んでいたという。

【高岡】四万十町下津井にあつた旧大正営林署・佐川製品事業所周辺の居住者らで故郷を懐かしもうと、14日に同町神山町の四万十農協会館で「佐川を語る会」が開かれる。同事業所の集落で生まれ育った田辺唯夫さん(60)らが企画。田辺

「語る会」では、スライド写真や思い出のエピソードを紹介。懇親会も開く。会費は5千円。締め切り7日。

申し込み、問い合わせは事務局の宮崎かずえさん(088-844-8573)へ。

営林署の思い出 27人語る

【窪川】旧幡多郡大正町下津井(現高岡市四万十町下津井)で1967年に閉鎖された大正営林署旧佐川(さがわ)製品事業所の元関係者ら27人が14日、

ク時は約60世帯計約200人に上った。

四十農協会館で三十数年ぶりに再会。昔の写真を見ながら、思い出話をすると、共同の炊事場や大浴場、洗濯場などが

や歌謡ショーがたびたび開かれたという。語る会は田辺さんらが呼び掛け、県内外へ移り住んだ50~80代の元居住者が「帰郷」。60代の男性は「同年代の子は20人ぐらいおつて、山川でよう遊んだ」。80代の男性は「結婚したばかりで佐川に移り住んだ。集落のお母さん連中が子どもを風呂に入れてくれた」と懐かしんだ。

(池本広中)

旧営林署施設周辺 住民ら14日懇親会

さんによると、同事業所は1940年(昭和15年)に開所し、67年閉鎖。周辺集落には営林署職員や関連業者ら約60人が住んでいたという。

「語る会」では、スライド写真や思い出のエピソードを紹介。懇親会も開く。会費は5千円。締め切り7日。

申し込み、問い合わせは事務局の宮崎かずえさん(088-8444-8573)へ。

旧営林署施設周辺
住民ら14日懇親会
四万十町
高岡郡四十町下津井にあつた旧大正営林署・佐川製品事業所周辺の居住者らで故郷を懐かしもうと、14日に同町神山町の四万十農協会館で「佐川を語る会」が開かれる。

同事業所の集落で生まれ育った田辺唯夫さんは(60)らが企画。田辺

宮林署の思い出 27人語る

旧佐川事業所関係者ら再会
四万

【窪川】 旧幡多郡大正町下津井（現高岡郡四万十町下津井）で1967年に閉鎖された大正當林署旧佐川（さがわ）製品事業所の元関係者ら27人が14日、四万十町榎山町の四万十農協会館で三十数年ぶりに再会。昔の写真を見ながら、思い出話をしながら、花を咲かせた。40年ごろ開設された

旧佐川事業所関係者ら再会 同事業所はツガやモミ、杉を切り出し、森林軌道で旧大正町の町中まで運搬。周辺には造林署職員や作業員らが住んで集落をつくり、ピーク時は約60世帯計約200人に上った。

田辺唯夫さん（60）によると、共同の炊事場や大浴場、洗濯場などがあり、広場では運動会

や歌謡シヨーがたひた
び開かれたという。
語る会は田辺さんら
が呼び掛け、県内外へ
移り住んだ50～80代の
元居住者が“帰郷”。
60代の男性は「同年代
の子は20人ぐらいおつ
て、山川でよう遊ん
だ」。80代の男性は
「結婚したばかりで佐
川に移り住んだ。集落
のお母さん連中が子ども
を風呂に入れてくれ
た」と懐かしだ。
(池本広中)

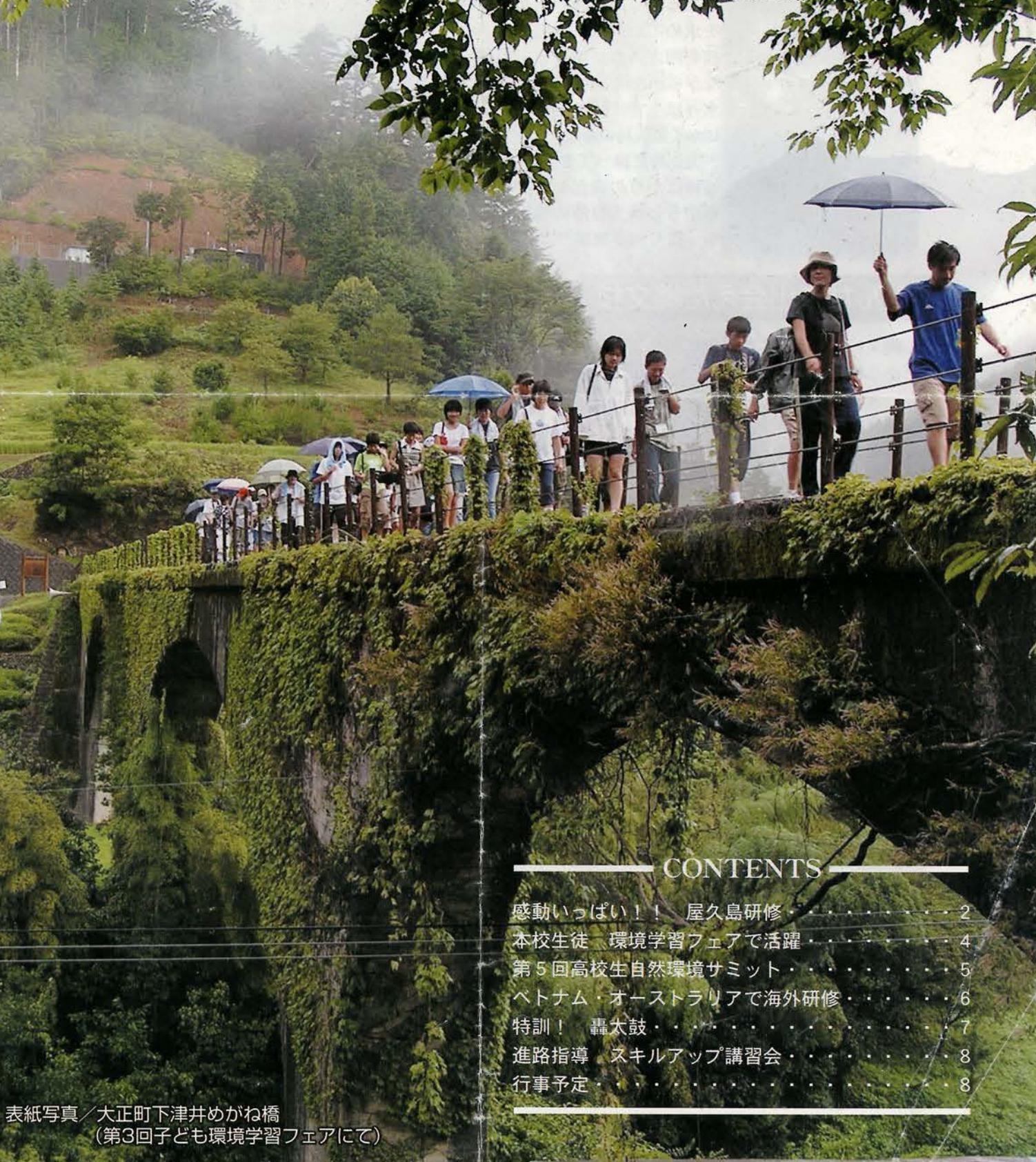
学校新聞

第79号

高知県立四万十高等学校

亀ノ森

幡多郡大正町田野々 590-1
TEL (0880) 27-0034
FAX (0880) 27-0477
Homepage URL <http://www.kochineted.jp/shimanto-h>
E-mail Address: shimanto-h@kochineted.jp



CONTENTS

感動いっぱい！！屋久島研修	2
本校生徒 環境学習フェアで活躍	4
第5回高校生自然環境サミット	5
ベトナム・オーストラリアで海外研修	6
特訓！ 轟太鼓	7
進路指導 スキルアップ講習会	8
行事予定	8

表紙写真／大正町下津井めがね橋
(第3回子ども環境学習フェアにて)

今年も感動いっぱい！屋久島研修

今年も7月8日(木)から12日(月)の日程で自然環境コース1年生が屋久島研修に行ってきました。研修終了後に1年2Hの中野佳子さんに研修について振り返ってもらいました。



1年2H 中野佳子

豊かな大自然



森の中は本当に自然でいっぱいだった。空を見上げるとまるで「高い緑の天井」といった雰囲気で、木々が光を求めて上へ横へと空を覆いつくすように伸び上がり、枝を四方八方に伸ばしていた。屋久杉やヤマグルマを見ながら話を聞いて、森の中の生存競争がとても厳しい中、木々は生きていくために頑張っているんだと感じた。とにかく屋久島の森は、大きな大きな森だなあという感じだ。

大正町に帰ってきてから周りの森を見まわしてみると、植林ばかりの森だということに気付く。屋久島でのあの素晴らしい大自然の風景を思い出しながら見ていると、やっぱり何か物足りなさを感じてしまった。



みんなで出会えた縄文杉

縄文杉という大きな目標に向かってひたすら歩き続けたことは私たちを大きく成長させてくれたと思う。だから仲間と一緒に協力し合い、しんどい思いをしながら一生懸命みんなで登ったことは本当に忘れられない経験となった。

縄文杉にやっと会えた時、言葉に言い表せないほどの感動と達成感が全身にこみあげてきた。ずっしりとした大きさと太さ。ごつごつした大きいコブに、そして樹齢7200年という生命力・・・。その迫力に圧倒されてしまった。

トロッコ道や四つんばいになりながら登る山道が続く、往復10時間という厳しい道のりを自分の足で歩き切ったことを、私たちはとても誇りに思っている。決して一人ではできないことを、仲間やそしてたくさんの人が協力してくれたことで達成することができた。仲間の大切さを身をもって思い知らされた。自分でも頑張ればできるんだ!という自信もついた。この経験は、将来何か目標や目的ができた時や、何か問題が起きた時にも活かしていくと思う。



お世話になった土佐海援丸

土佐海援丸での生活にも触れておきたいと思います。

誰もが船中での2泊は初体験という人ばかりで、船酔いになる人も少なくはなかった。そんな苦労話もあったけど、船に乗ったからこそいい事もあった。特に行きで見た夕日は、船酙いなどで疲れていた私たちを一瞬でいやしてくれた。あのきれいに染まった空や輝いていた美しい景色はまだ目に焼きついたまま・・・。それほど感動した。

またシイラが二匹釣れたことも感動した。

太平洋の海はとてもきれいな青色で、透き通り輝いて見えた。トビウオも船の横をたくさん飛んでいった。

それに比べて出発したときに見た浦戸湾の海は、何ともいえない色をしていたことを思い出す。茶色く濁ったような色で、とても同じ海とは思えないほどだった。



（略）



1968



2010/05/01

2010





44年頃





解体風景

七十三世第十百九十四至一百五十世稱
して北齋の名を絶ぜ殆ど全滅に歸した

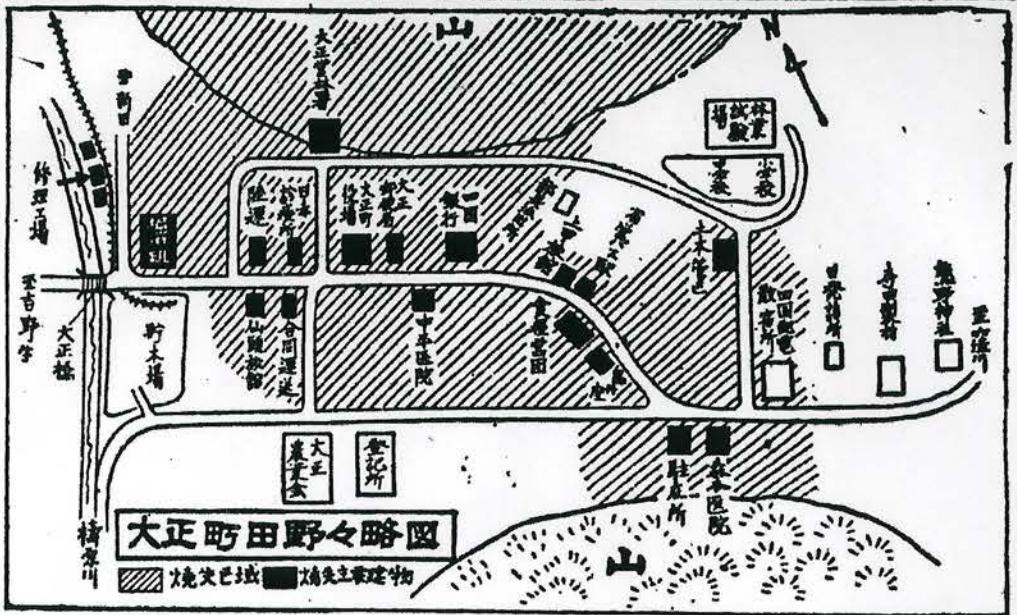
卷之三

わが田舎の田子の路
の故郷の故郷の故郷

医療者のためトラック用白衣などの調査を開始して

大火になつた。田舎町では緊急警報

二三九



大正町用野々略図

處では出動九百五十九方、区内、建設
食糧、林務、税金の各種を以てし
第一次救急隊を編成、ダンパーで開
地へ運行、また救援車を駆りし
宮本（理）富永、佐藤、宮口、西
脇各署頭が午前十一時、その上
田主を救急物資として田中布五十
枚、シャツ三百枚、袴三十五
条をはじめ、ショウガなど日用品
雜貨（ラジカ）一百点といふに及ぶ
調査に出席したが、あいだつきの
もので終始救急隊員を実施中
櫻井宅 木戸三千石、杉皮二千
五百坪（以上疊地）タダ八百圓
(市)

市から續々救援物資

鐵道部西京課所、西國セラミック
所、鶴賀倉庫一棟、食糧公團
土木管庫、河内課社、中平区
院、仙蹟、上甲兩旅館はじめ
約百九十四丁目五十世帯(五日
午後二時頃)を発見。闇
喫會、林業試驗場、高崎地質探
田野々巡査部長派出所、田野々
小学校など一部を焼け、一夜に
て北端の名鉄田野々を灰燼に化
した
山林、および火事は田野々、瀬
路川、吉川一円の同町山本惣長、
木原良徳、石原謙、安
田出頭して成田田中であるが修理工
場の火で火の大迫滅となりれ
てしまふ。損害額五千圓以上判明。
る民公

医療者のためトラック用白衣などの調査を開始して

またたく間に延焼

火の子の亂舞

重要書類の

大半は無事

着のみ着のままで呆然

焼跡に恐怖を語りあう受

(大正) 大正町大火の報、附者は風に満ちるので暖い春日和で、煙は燃えるにまか
五朝駄びくすが同町田舎との中を炎災者たるは積のみ積のかつただ
こがついた。午前六時、人はまだボツ然と寝てゐつたも
うで、起火して、いたが、まだ東北、昨夜の大炎の恐怖を語りあつとい
山林は燃え、燃えつゝじいた。そ、昨夜發火してから十時頃、付
近からがつて、消防署は烈風
して、近田町々二百五十戸の焼けの中に必死の消火作業をつづけた
跡は見るが無残な景観、昨夜の烈が、同町は用水開栓が多くなく
町制を廃止した
の田舎々にて、
(山崎村派生)